

現代遍路体験のなかに空海の宗教的世界を読みとる

Understanding the religious world of Kūkai through the experiences of modern-day Shikoku pilgrims

星野英紀 (大正大学元学長・常任理事)

Eiki HOSHINO ,

Former president of Taisho University, Permanent member of the Board of Trustees

Until around the mid-1960s most pilgrims walked the Shikoku pilgrimage and the traditional simple belief of *genze-riyaku* (benefits gained in this world) from the Edo period (1603-1868) remained. There were few people who made the Shikoku pilgrimage for sightseeing or recreational reasons from the Edo period onward, but there were many women, children, sick and disabled along the route. This is because *osettai* (the custom of helping pilgrims) existed on Shikoku. Even in modern society *osettai* is important and needs to be preserved from now on as a “living culture.” From around the mid-1960s increasingly more people made the pilgrimage by bus or car, and the number of people who walked the route almost disappeared. However, with the start of the Heisei period in 1989 the numbers of walking pilgrims increased, but such people no longer sought after *genze-riyaku*, but came to reflect on life and examine their identity. Akira HAYASAKA calls these people “philosophical pilgrims.” In this new era even the former Prime Minister Naoto KAN walked the pilgrimage, which was unusual because until now people at the top of society had never been seen making the Shikoku pilgrimage.

Kazuo TATSUNO writes in “Shikoku Henro” (pub. 2001) about the mystical experience of connecting with nature while in the mountains as a walking pilgrim. Many modern-day walking pilgrims experience the same as he did. This sense of oneness between nature and humankind overlaps with the world that Kōbō Daishi/Kūkai aimed for. Kūkai’s idea was based on a mystic belief where there is no boundary line between nature and humankind, but where both have become one. It is evident that the experiences of modern-day Shikoku pilgrims link themselves with the experiential religious world of Kūkai.

はじめに

公開講演会にお招きいただきありがとうございます。また、丁寧な紹介をしていただき恐縮しております。

さて、「メーカーの論理」「ユーザーの論理」というものがあります。これは梅棹忠夫氏が提唱され、有名になった考え方で、四国遍路でいえば、弘法大師や札所が前者、札所を巡る人々が後者になります。私はおもに、後者の実際に札所をまわっている人たちの研究を 40 年間やってきました。かつてシカゴ大学に留学した時、そこに人類学の偉い学者がいて、その人が巡礼の研究をしていました。それをみて、四国遍路の研究を思いついたというのが、私がこの研究を始めたきっかけです。

四国遍路とよく比較されるのが西国巡礼です。西国巡礼には、紀三井寺、清水寺、興福寺など大きな寺院がたくさんあります。一方、四国遍路にはそうした大寺院はほとんどありません。また、西国巡礼にはたくさんの文献が残っています。平安時代の藤原道長の日記には、彼が信仰した西国巡礼のお寺のことが記録されています。それに比べると四国遍路の方はそうした文献がほとんどありません。たとえば、42 歳の時に弘法大師が四国を回ったとされていますが、そのような文献は一つもないのです。確かに、彼が若い時に書いた書物の中に、徳島・室戸あたりのお寺を回ったという記録はあります。しかし、それも今あるお寺なのか、少し外れた別の所にあるお寺なのかよく分かりません。弘法大師が四国遍路を始めたというのは信仰的な事実ではあっても、歴史的な事実ではありません。その後の『今昔物語集』の中に、四国の辺地、海辺の道を歩くお坊さんが何人かいたと書いてありますが、すぐ別の話題になってしまい、四国遍路をしたとは書かれていません。つまり、文献からはよく分からないのです。

私は文献を読み解く力がありませんが、まわりでたくさんの方が実際に四国を回っているので、その研究をやろうかな、という気持ちで始めたのがこの四国遍路研究です。研究をはじめてみると、文献がないというのは実は間違いで、一生懸命文献を探した先生たちによって次々に文献が見つかり、今では四国遍路には歴史文献がないということではできなくなりました。この愛媛大学の研究会も基本的に文献を中心に研究していて、その成果が上がってきています。私たちがやっているように、お遍路さんを捕まえていろいろ聞いて回るのなかなか資料としてきちんとならないのですが、しっかりとした文献に書かれていることであれば、それを十分研究の論証に使うことができます。一方、人類学は昔から文字の無い社会を研究の対象としており、そのため観察をして人の話を聞くという方法でやってきました。ですから「ユーザーの論理」を使わざるを得ません。お遍路さんは何を考えているのか、どういう気持ちで回っているのか、札所のお坊さんが何を思っているのか、そうしたことを人類学的手法で探るのが私の研究の特色です。愛媛県は私の遍路研究において非常に重要な資料を頂戴している県ですので、こういう形でお話しできるのも多少の恩返しになると思います。

1 昭和 40 年以前の四国遍路

みなさんにプリント資料を配布させていただきました。普段はパワーポイントでスライドを映すやり方していますが、今日は文献ということにいたしました。歩き遍路の研究というのはなかなか大変で、歩き遍路さんは私がインタビューをしてもあまりありがたいとは思いません。むすっとしている人もいます。私の知っている若い研究者はお遍路さんと一緒に歩いてインタビューをしました。私はそこまではしませんでした。巡礼研究というのは非常に体力がいります。ただし最近巡礼研究には若い方もたくさん出てきていますし、優秀な人もいらっしゃいます。

私は遍路をした人の日記や手記を資料として研究もしていますが、ここ 10 年ぐらいの四国遍路の体験記には非常に特徴的なことが出てきています。もちろん昔は体験記などというものは書きませんでした。しかし、平成になったころから、そういった体験記などで、えっと思うようなことを書く人が増えてきました。それを今日は資料として使います。

お配りした資料の中のタイトルに「現代遍路体験のなかに空海の宗教的世界を読みとる」とあります。空海は若い時に京都に上って高級官僚になろうとしましたが、どうもうまくいかなくて、山野を駆け巡る私度僧になりました。空海は中国に行くまでの十何年間は行方がよくわかりません。そのころに四国を回ったといわれています。それから長安に行って密教を修得して帰ってくるわけですが、彼の目指す所は神秘主義です。神秘主義とは何かというと、一言でいうと人間と神とが一体となろうとすることです。イスラームにも神秘主義的な思想があり、それがイスラームが世界に広まるきっかけとなりました。空海が目指したのも、仏と人間が一体となることです。仏というのは自然も入りますから、つまり自然と人間が一体になるということです。そういう効果が今の遍路の中にあるという話を今日はしようと思います。

今年四国遍路 1200 年ですが、一般人の四国遍路が目立ってくるのは江戸時代初期から中期にかけてで、88 という数は戦国時代ごろから現れてきます。その後明治になってから大きな変化があり、仏教を国家から外すという神仏分離がなされました。神社とお寺とが分離されることによって廃寺になったお寺もあります。しかし無理があったのでしょう、数年経つと神仏分離という運動はなくなり、明治 10 年ぐらいからお寺が復活してきます。その中で明治時代中ごろから四国遍路も復活し、その後太平洋戦争、工業化社会、脱工業化社会を経て、昭和 40 年前後を境に四国遍路はずいぶん大きく変わりました。昭和 40 年ごろまでは素朴な四国遍路の姿が広く残っていました。明治になり鉄道を設立することになりましたが、四国では規模が小さく、また車もそれほど庶民に普及しなかったため、大正時代ぐらいまでは遍路は歩きが中心でした。一方関西では寺社参りと鉄道が明らかに結びついていて、このところが四国と違ってきます。

大正時代には観光ブームのようなものも出てきます。旅行評論家島浪男は四国遍路について以下のように述べています。

お四国の寺では何と荒唐無稽な物語が真（まこと）しやかに伝えられ、何と没常識的な慣習が儼然として行われ、何と摩訶不思議な御利益がびんびんして生きていることだろう。…今までのように、愚昧

の善男善女達を相手（あいて）として行こうというならいい。しかし、時代と共に生きて、新時代の巡拝者を迎えようと言うのには、少なくともまず第一にあまり馬鹿々々しい伝説や、慣習や、御利益よやの一切を抹殺し撤廃すべきだ。（島浪男『札所と名所 四国遍路』宝文館、1920年、440～441頁）

漫画家・評論家の宮尾しげをも以下のように言っています。

「ナーノシ、昔この山の麓に慾の深い婆さんが居ましてノシ、浜から貝をとってきて 煮てますと、そこへ弘法大師さまがお出でになりましてノシ、その貝をくれとおっしゃったが、供養しなかったノシ、煮てみた貝がみな石に成って仕舞ひましてノシ、婆さんは怒って又とって来て煮るとノシ、又石になりましたノシ、その度毎に怒って捨てたのがこの食はずの貝でノシ、これを削って水に溶かして光明真言を唱へて吞みますとノシ、ちょっとの病気ならすぐ癒りますノシ」と説明つきで宿の主婦が貝の化石を売りに廻る。お信仰の人達は有難がって頂いて買求める、かうした遍路たちには衛生も何もない弘法さまであれば良いので、無茶苦茶である。」（宮尾しげを『四国遍路』鶴書房、1943年、51頁）

江戸時代にも真念という人が同じ話を残していて、今でもその土地にはこの話が伝わっています。

江戸時代から四国遍路にはいくつか特徴がありました。江戸時代になると一般人の中で巡礼や遍路というものが認識されるようになり、日本人の旅の習慣が出来てきます。旅の代表がお伊勢参りです。伊勢神宮には昔は誰も行かなかった。それは伊勢神宮がたくさんの荘園を持っていたからです。ところが、中世社会が崩れ、荘園が失われていきます。戦国時代の武将たちがやったことは一種の農地解放です。ではどうなったかということ、その分田畑が一般の人々のところにいき、彼らの財産が増えるわけですから、そうした人たちに神社を護ってもらわなければならないということになります。そうすると、一般の人に祈願してもらおうとして、伊勢の方から担当の人が来て、お札を渡したりします。江戸時代最も多くの人が行ったのがお伊勢さんです。団体で行って寺社をお参りして、お楽しみもするという旅パターンができるのは江戸時代です。浅草寺や善光寺などへの参詣もそうした娯楽的要素が強かったようです。ところが四国遍路には、そういうものがありませんでした。四国というのはもともと観光的な魅力というか、惹きつけるものが少なかった。

ある方の研究によると、他の巡礼と比べると四国遍路には女性と子供の姿が目立つようです。もう一つ多かったのが身障者や病人です。それは四国遍路にはお接待があったからです。今でもおもてなしブームということでお接待はあります。四国のお接待というのは古くから民衆文化として根付いていました。これは、この近代社会になってからは都会の人たちにとっては当惑する話で、それこそ大都会で歩いていると蜜柑一つもらっても非常に当惑します。歩く方全員とは言いませんが、現代遍路のこれまでのお遍路さんとの大きな違いの一つは、高学歴の方が多いということです。そういう方々は特に近代的な生活習慣の中で生きてきていますから、そのような支え合い・絆という世界とは日常的にはあまり繋がっていません。ですから非常に当惑します。福島に行きますと、原発で避難している人たちが温かく迎えてくれます。それはなぜかというと、普段から周りの人々と繋がっているからです。普段はマイペースで俺は一人で生きてるんだという人が、いざ絆と言われてもなかなか絆は生まれません。そういう意味では、お接待は一周遅れの長距離ランナーです。ずいぶん遅れていることをやっているなどと思ったら、トップランナーになってしまった。お接待は、生きていく文化としてこれからも継続していかないとはいけません。

2 昭和40年以降の四国遍路

昭和40年ごろから四国遍路は大きく変わりました。いろいろなところでバスツアーが増えました。それから、マイカー時代になります。こうして昭和50年頃になると奇人以外には歩いて遍路をする人はほとんどいなくなりました。

早坂暁という愛媛県出身の有名な脚本家があります。彼の実家はちょうどお遍路さんが通る道にあって、お遍路さんが曲がるちょうどカーブの所に家がありました。お遍路さんが来るといつも接待などをして、子供のころから自分の生活文化の中でお遍路さんと交流をしていました。あるとき、小さい子供連れの親子遍路が来ました。事情があってもうこの子を連れて歩くことができないから、お宅で預かってくれといわれ、そ

ういう時代でもあり、その子を預り、結局早坂家で育てることになりました。早坂氏は第二次大戦中に江田島の学校に進学し、彼が家にいなくなってから、早坂氏のお母さんがその娘に、実はあれは本当の兄貴じゃないんだと伝えました。彼女の中に微妙な心理的变化が生まれ、自分も江田島へお兄ちゃんに会いに行くと言って、20年の8月5日に家を出て広島に行き一泊して、次の日朝早く広島市内の宿を出た時に原爆が落ちました。それっきり行方不明になった。早坂氏はその子と血がつながっていないので、大きくなったらその子と結婚しようと考えていました。ですから、彼女が死んだということを聞いて非常にショックを受けたのですが、早坂氏はちょうど広島にいなかったそうです。戦後になってからですが、彼女は市電の中で亡くなったのだらうということで、早坂氏は市電を一台借り切りまして、その中に祭壇を作ってお葬式をしたそうです。2000年に彼が書いた次のような文章があります。

ところが、この四国に今一大異変が起きている。まず、歩き遍路が増えている。戦後の車社会は、お遍路さんの大多数を車に乗せてしまった。歩いてこそその四国遍路、里を通り抜けてこそその四国巡礼なのだが、10数年前に歩き遍路の姿が激減した。ところが、バブル景気がはじけてから、歩き遍路の姿が四国の遍路道に帰ってきた。それも、若い人、40代・50代の人。昔のお遍路さんは、ほとんどが高齢者と言ってよかった。60歳代が大半であった。それが、40代・50代の働き盛りの人たちが歩いている。また、20代の若い人が、自分が何者なのかを探したり、大学へ行っているだけでそれでいいのか、自分に何ができるのかを考えたり、この問いかけを胸にして歩き出した歩き遍路たち。この遍路たちこそ“哲学的遍路”と言える。1000年の歴史の中でやっと哲学的な遍路が現れたことを私は喜びたい少し誇りたい。言うまでもなくこれは日本社会の成熟とある種の退廃を写しているのだが、私は成熟の方に希望を見出したい。(早坂暁「日本の“心調”より」『太陽』2000年8月号、平凡社)

このように彼は書いています。つまり、御利益一辺倒だった遍路ではなく、人生を考える、アイデンティティを求める、そういう遍路が出てきたのです。これは誠に結構なことで、喜びたいことです。早坂さんはこのように物心がつく前からお遍路さんと非常に近い生活空間に浸っていました。ただ彼自身はお遍路をしたということはないようです。

1990年代、歩き遍路ブームになります。この会場にも歩かれた方がたくさんおられると思います。その数は一時5000人と言われていましたが、全員が八十八ヶ所をきちっと回るわけではありません。1番の札所から10番の札所ぐらいまでは多くの方が歩いているようです。先々週高知へ用があつて行きましたが、車で空港から1時間ぐらい山の方へ行く間に7、8人ぐらい歩いていました。早坂さんが言ったのはこの歩いている遍路です。ただ、歩き遍路は1日に20km以上歩きますから、それに向く人と向かない人がいます。

お遍路さん全体の数ははっきりわからず、10万人あるいは20万人といわれていますが、実はお寺さんは何人の人が参拝しているか大体把握しているのです(諸般の事情から公表はされていませんが)。近年四国には高速道路が次々にできていますが、四国遍路の研究をしている者としては、高速道路が開通したら巡礼の動きがどう変わるかはおもしろい研究材料になると思います。

平成になってからの新しい遍路として、菅直人元首相の四国遍路があります。彼は新聞にこのように書いています。

2004年に年金未納問題で党代表を退き、直後に妻がクモ膜下出血で倒れました。自分を見つめ直せると思って、その年2004年の4月から1回に6日～14日、全7回四国入りしました。四国にはお接待の文化が根強くお遍路さんに対してものすごく優しい、自分の代わりにお参りしてくださいという気持ちが身についています。結願が2013年9月、心の中に宝物ができました。人と人とのつながりです。今の日本は生きていくうえでストレスが多い社会ですから、自分の足元を見つめ、人生を再構築するきっかけにしてほしい。それにこれからの時代はお遍路のようないい日常だと次について考えることができました。八十八ヶ所を1回で回るのは大変だから、自分の自由でお遍路するのはいいと思います。

どうしても西国三十三ヶ所との比較になりますが、藤原道長は信仰が深く、お寺やお宮へよくお参りに行

きました。お参りに行くためには潔斎をせねばならない、しかし自分の家でするとたるんでしまうから、毎朝自分の家から出て、他人様のお屋敷をお借りしてそこで精進潔斎をして、また夜帰ってくる。そういうことをして体を清めて、高野山に上ろうとか、熊野へ行こうとかしているわけです。西国三十三ヶ所にはそういう貴族社会のセレブがたくさん行っています。

どうでしょうか、四国遍路の場合は。社会のトップにいた人が四国遍路をしたということ、私はいまだかつて聞いたことがありません。菅直人氏のような人が堂々と四国遍路をし、それを皆に勧めるなどというようなことは、私は四国遍路史において画期的なことだと思います。首相が宗教施設を参拝するといういろいろな批判がありますが、菅直人氏が四国遍路に行き、それは憲法違反だ、という人は一人もいませんでした。しかし、札所は実際には明らかな宗教施設です。これが四国遍路の特徴だと思います。そういう意味で、日本人の心の中における四国遍路の存在は、私は非常に大きいものだと思っております、菅直人氏を取り上げた次第です。

こうしたことは田舎の農家のおばあさんたちが願ひ事のために四国を回っていた時代には考えられなかったことです。四国遍路にはハンセン病患者の人もたくさんいました。ハンセン病患者だけが通る遍路道もあったという方もいます。ハンセン病患者の手記には、ハンセン病は遺伝するといわれたので、お金をもって四国に追いやられ、一生遍路を回り続けた、とあります。そういう時代に比べると、早坂氏のいうような哲学的遍路、菅直人氏のような日本を代表する人が四国を堂々と回り、その意義を唱える時代になったことは非常に大きなことだと私は思っています。それは、四国の人々が優しいとか素朴だとか、そういう問題だけで片付けられることではないのです。

3 辰濃和男氏の体験指向型遍路

岩波新書に辰濃和男『四国遍路』（2001年）という本があります。これはガイドブックではなく、自分が歩いている時に山の中で自然といかに触れあったかというような、実に神秘的な、体験指向型遍路の路線で書かれています。

①弘法大師空海に「澗（かん）水一杯 朝（あした）に命を支え 山霞（さんか）一咽 夕に神を谷（やしな）う」（朝には清らかな水を飲んで命を支え、夕には山の気を吸って霊妙な精神を養う）という詩がある。空海は大自然に融和する境地をたのしみ、乾坤（天と地の意）のなかに大日如来を見、大日如来のなかに乾坤を見たのだろう。だからこそ死ぬ前に「吾れ永く山に帰らん」といい残したのだ。大自然との融和といい、太古との融和という。そこにどんな意味があるのかは、歩きながら感じ取ってゆくほかはない。（10～11頁、文中の空海の一文は『性霊集』巻1「山中に何の樂かある」）

②途中、雨支度をして歩きだす。さして強い雨ではなかったが、白衣も肌着もじわじわと濡れてくる。はじめは不快感があったが、そのうちに慣れてきた。滝に打たれたときのことを思えば、びしょぬれになってもたいしたことじゃない、という気持ちになってきた。いつか、雨の息を息として歩く、雨に溶け込みながら歩くという心境が生まれていた。ずぶぬれという感触をからだ全体で味わっているうちに、不快感が消えていった。雨との新しい出会いだった。（48頁）

③二十四番最御崎寺に着いた日は、三十五キロも歩いた。私としては歩きすぎの一日だった。…もう一歩も動きたくない。まあ、遅れてもやむをえないとあきらめながらあたりを見ると、椿の花が落ちていた。拾い上げると、かすかな香りがあった。香りと共に森の気を深々と吸い、何回か深呼吸をした。間をおいて、立ち上がる、岬が見える。曇り空の下に模糊とした海がある。模糊とした海を眺めているうちに力がわいた。不思議な体験だった。歩きだすと、あとはお大師さんが後押ししてくれるようからだに勢いがつき、足に力がゆきわたり、一気に登ることができた。たちまち宿坊に着いた。五時前だった。いままでは、初めから「三十キロ以上はとて無無理だ」と思うことで自分を縛っていた。が、その気になれば三十五キロだって歩くことができる。疲れて倒れそうになって、壁際まで追い込まれたとき、人間には潜在的な力が湧き出てくるのだろう。それを野性の力といってもいいし、自然力のバネといっ

てもいい。とにかくそういうものが噴き出して殻を突き破る。体得、ということのおもしろさがそこにある。私が味わった「不思議な体験」は実は多くのお遍路さんが体験していることだろう。「疲れてよたよたしながら山道を歩き、うす暗くなって困り果て、一心に南無大師遍照金剛を唱えていると、坂のはるか上がぼっと明るくなり、その光に導かれて歩くことができた。あれはお大師さまだったのじゃろうか」という話を昔のへんろ道で聞いたことがあった。多くのお遍路さんが、いつのまにか自分の限界を突き破って歩いていた、という体験をしている。(76～77頁)

④自然の精髓をとらえるのに大切なのは、風の強さ、雨の冷たさをじかに体にしみわたらせることだろう。背や腹に雨をしみわたらせ、濡れるにまかせる。すると、自分自身が嵐の風景の一部に化す感覚がでてくる。自然の精髓はアタマを働かせてつかみとるのではなくて、体でつかみとるものなのだろう。むしろアタマの働きを極度に抑え、脳にこびりついた「さかしらごころ」の出番を抑制したとき、いままで聴こえなかったものが聴こえ、見えなかったものが見えてくる。かつての縄文人が聞き分けていたであろうさまざまな風の声、さまざまな波の声を耳がとらえるようになる。暴風雨は、森を思う存分に荒らしながら、一方で、山に大雨の恵みをもたらす。それが大自然の営みだということが肌でわかってくる。(101～102頁)

⑤歩きながら一再ならず思うのは、土の上を歩く機会が少ないことだ。舗装道路の硬さに慣らされた足の裏は、落ち葉のつもった山道に出あうと、それだけでやわらぐ。舗装路は足をはね返すが、土の道は足を包みこむ。「土と融和している」という感じになる。底の厚い登山靴を履いていてもそうだ。(157頁)

⑥へんろ道では時々、なぎさや草地の上に坐りこみ、裸足になった。裸足で大地を踏み、腰を下ろしていると、体が大地の深いところから元気をもらっている、という気分になってくる。大地の気が私たちのからだに流れこんでくるときに感ずるのは融和の感覚である。(159頁)

⑦心身が解き放たれるにつれて、自分の思考を縛る「概念的なもの」がたいそうひからびたものに思えてきた。たとえば海についての既成概念を否定してみる。否定し、まっさらになった「空」なる空間をさらに否定してみると、そこに現れるのはなまなましい、生きた空間だ。その空間こそが海の無尽蔵な力、まばゆいまでの多様性、暗さ、不気味さ、命を創り出す豊かさを如実に教えてくれる。いってみればアタマで海を見るのではなく、こころで海を見るのだ。まっさらになったこころで見なくては本当のところが見えてこないと自分にいい聞かせる。概念に縛られてものを見るときは真の驚きはない。概念的なものを否定し、海に融和し、山に融和して見る新しい空間には静かな驚きがある。

「暁の月、朝(あした)の風、情塵(じょうじん)を洗う」。空海の言葉だ。情塵は心の汚れのことだろう。お大師さんは、暁の月、朝の風に洗われたところで月を見、風を感じ、そこに大日如来の靈性を見たのだろう。大日如来は宇宙の生命の根源だ。私にはその姿が宇宙にみなぎる大自然の営み、原始の生命力と重なってくる。いってみればそれらは、近代の技術文明が総力をあげて押しつぶしてきたものなのだ。近代人の、衰弱しつつある太古の生命力をどうやってよみがえらせるか。宇宙に感応できる自然力を得るにはどういう営みが必要なのか。その営みを一つの動詞で表すとすれば「融和する」になるだろう。四国の天地はそのまま大自然に融和するための道場で、この道場巡りに終わりはないが、その営みをへて、ほんものの人生が育ってくるのだと思いたい。(162～163頁)

⑧私がへんろ道で学んできたものもまた、大自然に包みこまれて生きる歓びを味わうことであり、宇宙の営みをからだで感ずることであり、自分のなかの太古、もしくは野性の生命力を呼び覚ますことだった。山だけではない。海もある。海もまた、宇宙のひろがりを感じずる修行の場にふさわしい。太陽、月、海、山、風、花、虫などの一切が深い つながりをもっていると感ずること、それを私は「宇宙感覚」という言葉で表現したいし、太古から人間に備わっている野性の生命力がよみがえったものを「太古感覚」と表現したい。私にとって、お遍路の日々は、この二つの感覚を呼び覚まし、磨き、たのしみをひろげ

てゆく明け暮れでもあった。(238頁)

4 歩き遍路の体験と空海の宗教思想

辰濃和男氏の遍路体験は終始、人間と自然の一体感、近接観を説いている。実はここで辰濃氏が言っていることは、空海が目指した世界と重なり合うと思うのです。空海の実験的思想は比較宗教思想の分野からいえば神秘主義的思想です。その教えは宗教類型論からいえば神人同格教といえます。これに対するものが神人懸隔教で、そこでは創造主としての神と人間とは離れています。これと違い、神秘主義は神と人間が同じレベルにいます。一言でいえば、空海の宗教的世界は自然と人間の間を境を設けないのです。空海の若い頃の著書『三教指帰』のなかに「明星来影す」という言葉があります。これは口の中に金星が入ったと普通は解釈されています。つまり、空海は人間と自然物が一体になるという感覚を持っていたのです。「明星来影す」は、科学的にありうるかどうかではなくて、自然と感応するということなのです。この言葉は、空海の自然と自分との一体感を表して、私はこれが空海の密教的体験の原点だと思います。

芭蕉が、「気がつけば ならずな花咲く 垣根かな」という俳句を詠んでいます。この句は、宗教的にいえば、芭蕉とならずなどが感応し合っているといえます。自然と人間との関わり、感応というのはこういうものなのです。ならずが役に立つか立たないかという功利的な問題ではなく、自然と自分とがどうすれば関わるのかということです。ならずはつまらない雑草だ、と概念としてとらえるならば、自然と自分との交流や感応は成り立ちません。

空海の『吽字義』に「草木また成ず（成仏す） 何に況んや有情をや」（草木さえ成仏するのだから、どうして人々が成仏しないことがあるか）という文章があります。これは真言密教だけではなく、むしろ大乘仏教にある考え方で、あらゆるものが成仏するというものです。同じく空海の『即身成仏義』には「六大無碍（ろくだいむげ）にして常に瑜伽（ゆが）なり」とあります。那須政隆『即身成仏義の解説』（成田山仏教研究所、1980年、103頁）には以下のようにあります。

六大が法身であって、無始本来にして渉入相応し、万物の生成流転を維持展開している。このように永遠常住の上に、六大が体性として大自然を展開し続けているのを大観すれば、自然の一事一物が大自然の実際に住し、生成流転のまま常住不変なのである。即身成仏偈の第一句に「六大無礙にして常に瑜伽なり」とあるのは、上述の如き意味である。

つまり、この世のあらゆる存在は表面的にみると止まっているあるいは固定されているようで、全部動いているのです。

加藤精一編『即身成仏義 声字実相義 吽字義』（角川ソフィア文庫、2013年、29頁）にはこう書かれています。

こうして考えますと、六大法界体性で構成されている法身大日の身体も私たち一切衆生の身体もお互いに礙（さわ）り無く同体のごとく深くかかわり合っていて実在しているわけで、大日が常住不変であるように私たち衆生も常住不変のたしかかな存在として生きているのです。

つまり、すべてを仏と見るということであり、仏と人間とを区別してはいけないうのです。辰濃氏の話に戻すと、自然と人間を分離して生きるということが、科学が発達した大きな出発点です。自然も人間もみんな相通じ合っているとすると、近代科学は成り立ちません。そういう意味では、自然と人間とが一体だ、私もならずなも同じだというのは、あまりにも非科学的です。しかし、芭蕉の言葉でいえば、何の変哲もない道を歩いている、そこに個別を見つけるというところに、生きるということの豊かさが出てくる、ということだと思います。自然の科学的な認識を取るか、宗教的な認識を取るか、どっちが正しいかという話では、私はないと思います。つまり、両方の総合的な問題、お互いが補うような形になるのです。そこに一つポイントがあると思います。辰濃氏の言うような自然と人間との一体感が四国では味わえるんだよ、それはすごく大切なんだよ、自分が物事に対して一面的な見方しかしていなかったということがそこでよく分かるんだよ、

ということです。

最近の歩き遍路の方々の大きな特色は、体験記をたくさん書くということです。なかにはパソコンを持ち歩いてブログを書いている人もいます。なぜかそういう体験をしゃべりたくなるようですが、そのほとんどが自然の豊かさあるいはそれによく似たことを書いています。こういう体験は歩き遍路の方々みんなにあるのではないかと思います。辰濃氏のような筆力はないかもしれませんが、自分の回った記念としてお書きになった中で、自然との一体に触れている方が多くおられます。ですから、辰濃氏のような体験は、彼だからできたのではなく、体験としては他の方々にもあったと思います。もちろん、明星が口の中に入ったということだけを信じてこの世の中を生きてゆくことはできません。しかし、自然と自分とがどうすれば感応できるのかを考えることで、私たちの自然に対するものの見方も変わってくるでしょう。「さかしらごころ」を捨ててすべて素直になろうという世界が有意義である、と私は思っております。

では、歩かないとこうした体験やものの見方はできないのでしょうか。ある研究によると、バスやタクシーでガイドさん・運転手さんの説明がある巡礼の方がずっとためになる、というデータが出ています。歩き遍路は身体的な環境的なことばかりに全神経を使う。歩き遍路の悩みは食べる事・寝る事・排泄する事だといえます。食べる事―朝出たら昼どこで食べよう―、寝る事―夕方どこで宿を確保しよう―、排泄する事―催してきたときどこでしょう―。この三つは生理的なことなので、大切なことであることは事実です。東西どここの巡礼でもそうですが、みんな一日歩くとヘトヘトになります。スペインのサンチャゴ巡礼では、修道院がやっている無料の宿泊所に泊まります。問題は、誰よりも早く寝る事。なぜなら、いびきで眠れなくなりますから。遍路宿自体は少なくなっていますが、今でも残っています。お寺に泊まることもだんだん減っているようです。こうして歩き環境はなかなか厳しいので、歩き遍路のガンバリズムが出てきてしまう。ひつとすると「我」が膨張する。でも仏教の修行というのは「我」を滅することが第一目的ではなかったのか、ちょっとどうかなのというところはあります。車に乗っている方の多くはあっち（歩き）が本物だ、という思いがあるようです。しかし、歩き遍路が、俺の方が本物だ、というのはちょっと違うと思います。

おわりに

最初にもいいましたが、四国遍路は西国巡礼と比べると文献が少ない。また歴史的に大きな役割を果たしていないお寺が多いので、そこにある文化財についても乏しいのかなと思っておりました。しかし、今日県美術館の遍路展をみて、様々な仏像や史料があることに驚いています。これからは史料がたくさん出てきて、今わからないことがわかるようになるかもしれません。たとえば、88 という数がいつごろに確定したのかなども、色々な史料を重ね合わせていくと、確定できるようになるかもしれません。

2000年以來のこの愛媛大学の遍路研究プロジェクトは、文部科学省が地方の大学の研究テーマとして遍路研究は非常にユニークだと言ってくれているようなので、ぜひこれからも四国遍路研究が続くようにしていただけたらと思います。私のようなユーザー論理の遍路研究にも若い研究者がたくさん出てきていますので、ますます四国遍路に対する注目は高まるでしょう。では、このあたりで話を終えることにします。